The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

印度學佛教學研究第六十三巻第二号　平成二十七年三月

親鸞における「疑」の研究
――特に『往生要集』との比較を中心として――

宮地　崇

本論では、『往生要集』における源信の疑の役割または意義を考察し、それを承けて源信と親鸞の疑観を対比し、両者の疑観に関する共通点と相違点を明確にしていきたい。源信の疑観を明確にすることによって、親鸞の往生思想における信心とその反対である疑心という二元論的概念の背景を明らかにしたい。

一　はじめに

これまでの浄土教思想史の研究において、「信」に関する研究はなされてきた。しかし、浄土教思想史においては、「疑」も重要な問題であろう。そこで「疑」に着目して浄土教思想史をみていきたい。

従来、源信の往生思想に関しては、「信」の立場より検討がなされている。淺田正博は、止観念仏を己心の浄土とし、五会念仏を西方の浄土とに分けている。そして源信が著述した『往生要集』でこの二つの行を結びつけて、論理的に説明しているのである。よって、西方浄土に往生するために止観念仏を必要とすると源信が述べたという。(1) では、二つの阿弥陀信仰を(2)『往生要集』の中に集約した源信は、その信仰の反対である「疑」に関してどのように理解していたのであろうか。また源信の疑観は『往生要集』のどこにみられ、往生思想のどこに位置づけられてくるのか明らかにしてみたい。

二　親鸞の疑観

まず、親鸞において疑いの心（疑心）は浄土往生を妨げる主要な因である。二種深信では「信下…无レ疑无レ慮、乗二彼願力一、定得中往生上」(3) と説明されるように、衆生は、本願に対して疑いや計らいがあるため、弥陀の願力に乗ぜず、浄土に往生することができないのである。つまり、信心の反対は疑いであり、またその疑いとは弥陀の本願に乗託できない猶予の心である。また、『一念多念文意』では、「また助行をこのむもの、これすなわち自力をはげむひとなり。自力といふ

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

は、わがみをたのみ、わがこゝろをたのむ、わが力をはげみ、わがさまざまの善根をたのむひとなり」[4]とある。自力というのは、往生において自我の心を信頼し、罪福心を信じ、阿弥陀仏の本願を疑う心である。そのため、自力心と疑心は同じのものである。親鸞における疑観は信心の反対であり、本願に乗託せず、自我を信頼する心である。

三　源信の疑観

三―一　源信の疑観の対象

源信における疑の対象の一つは本願または仏智である。「惑障相隔雖レ不レ能レ見、大悲願不レ可レ疑」[5]と、「不レ了二仏智・不思議智・不可称智・大乗広智・無等無倫最上勝智一、於二此諸智一疑惑不レ信」[6]とあるように、疑いは仏の本願、または仏智に対してのものだと位置づけられるのである。

三―二　源信の念仏に対する疑い

まず、「観察門」の中の「雑略観」に注目すると白毫の相好を観念できない者に対する行が取り上げられている。極重悪人には称名念仏以外に方法がないとあるように、念仏行を行者に「規範的」に勧め、そして念仏行以外の往生の方法がないため、念仏に対する疑いを誡めている。

「其の念仏の心は必ず須く理のごとくすべし」[7]とあるように、念仏は真実に相応する行であり、理より事にあらわれ衆生一人一人を往生せしめる行であるから念仏を本と為す。[8]極重の悪人が観念すらできないのは理を領解していないからである。故に、念仏がこの理から事へとあらわれる時に行者の念仏に対する疑が生じる。念仏の規範的往生の方法で往生が可能であるところで、その行に対する疑があらわれる可能性があり、これを源信が誡めているのである。

以上の文からみると、源信の疑観に含まれるのは①本願と仏智（弥陀の救済力）に対する疑惑、そして②規範的往生の方法論に対する疑惑である。

四　源信・親鸞の相違点

まず、親鸞の念仏観は弥陀の願力で成就された大行であり、これを衆生に回施する。また、信心と念仏は不可分のものであり、両者は他力回向の願力より衆生に与えられる。[9]

続いて、親鸞の疑観は信心の反対のものであるから、疑心は信心を受け入れない心であると位置づけている。そして、信によって報中の報に往生し、疑によって化土に往生すると親鸞は明かすのである。

しかし、源信の疑観は決して本願・仏智のみに対するものだけではなく、往生する方法である念仏に対する疑いも彼の疑観に含まれる。「問答料簡」の「信毀因縁」には、次のように述べられる。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

若雖レ疑二仏智一、而猶願二彼土一修二彼業一者、亦得二往生一。如二『双巻経』云。「若有二衆生一以二疑惑心一、修二諸功徳一、願レ生二彼国一、不レ了二仏智・不思議智・不可称智・大乗広智・無等無倫最上勝智一、於二此諸智一疑惑不レ信、然猶信二罪福一、修二習善本一、願レ生二其国一、此諸衆生生二彼宮殿一…」已上 疑二仏智恵一、罪当二悪道一。然随レ願往生、是仏悲願力[10]

仏智を信じるものは報土に往生するが、仏智を疑うものは（報中の）化土に往生する。つまり仏智を疑っても諸々の功徳を修し、往生の願いがあれば報の中の化土（仮の極楽往生）に往生することができると源信は説明する。ゆえに、行者は仏智疑惑があっても、往生する可能性があるということは、親鸞が法然から受け継ぐ信疑決判の概念と相違する点である。源信にとって衆生が往生するには信心よりも行、つまり念仏の行が必要であるとされる。したがって、仏智疑惑だけではなく、往生の方法である念仏為本を疑うなと源信は誡めるのである。

しかし、親鸞において、往因はあくまでも無疑の信である。親鸞が上の文を「化身土文類」に引用する理由は化土往生を否定し、ただ報土に往生せよと勧めているからである。そのために仏智あるいは本願を疑うなと述べる。[11]

この相違点をさらに詳しくみていくと、両者が使う「執心牢固」と「執心不牢」の位置づけに若干の違いがあることが分かる。[12]「大文第十」の「問答料簡」に「是知雑修之者為二執心不牢之人一。故生二懈慢国一。若不二雑修一専行二此業一、此即執心牢固、定生二極楽国一」[13]とある。上述したように、源信の見解では仏智に対する疑があっても、念仏の行さえ修していたら往生は可能である。そして、「執心牢固」という言葉の定義には仏智疑惑の是非を問わずに修する専修念仏の行であると位置づけられる。勿論、これは念仏そのものに対する疑がない前提での「執心牢固」である。

つまり、行者は「執心牢固」であっても、仏に対する疑をもつ可能性がある。また、「執心不牢」は仏智疑惑の是非を問わずに雑修の行を修する意味になる。言い換えると、「執心牢固」は仏智疑惑の是非を問わず、そして念仏行に対する疑がないため、行者の心が専一になる。これは源信が強調したことであった。

一方、親鸞においては「執心牢固」を信心として捉え、「執心不牢」を仏智疑惑・本願疑惑として結論づけるのである。そうみていけば、「執心牢固」・「執心不牢」は源信から親鸞に移るとともに「行」から「信」の問題へと移る変遷が窺える。

五　まとめ

親鸞と源信にとって疑は、仏智または本願に対するものである点において共通する。だが、源信の疑観は阿弥陀の救済

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

力に対するものだけでなく、規範的往生の方法である念仏に対する疑などが含まれるのである。よって、源信の「疑」は往生における救済論よりも、方法論との密接な関係があると考える。一方、親鸞の疑観は方法論よりも本願、つまり弥陀の救済力のみに対するものである。

両者の相違点は具体的な用例でみると「執心牢固」・「執心不牢」に見られる。同じ「執心牢固」・「執心不牢」の言葉でも、両者の疑観に関する相違点を明確にすることによって、源信と親鸞それぞれにおける往生思想がどのように変遷したのかが分かる。つまり、「疑」という概念を通して、「行」を中心とした往生思想から「信」を中心とした往生思想へと変わっていったのである。

従来、親鸞と源信の疑観は同一のものであると説明されてきた。しかし、親鸞は他力の視点からみて源信の往生思想の核心を見出したのであるが、両者の疑観は同一のものでない一面をもつことに、注意を払うべきであろう。今後の課題として、法然の疑の位置づけを考察し、彼の疑観がどのように源信と異なり、そしてどのように親鸞の往生思想における疑の概念に影響したかを考察したい。

1　淺田正博「西方の浄土と己心の浄土」（『中央仏教学院紀要』一〇、一九九三年）、三七頁。　2　佐藤哲英『源信和尚の念仏』（『竜谷教学』一五、一九八〇年）、一一四頁。　3　『浄土真宗聖典全書』二（浄土真宗本願寺派総合研究所、二〇一三年）、七一頁。（以下は『浄真全』と略す。）　4　『浄真全』二、六七二頁。　5　『浄真全』一、一一六七頁。　6　『浄真全』一、一二三六頁。　7　『浄真全』一、一一五二頁。　8　武田龍精「日本浄土教における「菩提心」の思想的展開（三）」（『龍谷大学論集』四六〇、二〇〇二年）、四五頁。　9　『浄真全』二、七九三頁。　10　『浄真全』一、一二三六頁。　11　『浄真全』二、五一〇頁。　12　高田文英「懈慢界の解釈――『群疑論』とその後の展開――」（『真宗学』一二三・一二四、二〇一一年）、三四二頁参照。　13　『浄真全』一、一二一二頁。

〈キーワード〉　本願疑惑、信毀因縁、報化二土、執心牢固

（龍谷大学大学院）

NII-Electronic Library Service